TCM

Tokyo College of Music
Journal

July
2017
No.45

東京音大ジャーナル45号
http://www.tokyo-ondai.ac.jp

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

〈特集〉
来年、創立111年を迎えるにあたり 理事長×学長対談 2
創立111周年事業プロジェクトが始動 4
ミュージック・リベラルアーツ専攻 開講 6
東京音楽大学ならではのマスタークラス 8
〈シリーズ〉教員紹介 10
2018年度から生まれ変わる『声楽専攻』 12
本学初の博士学位授与／初の「飛び入学」 13
活発化する本学の交換留学制度 14
〈シリーズ〉東京音楽大学から世界へ 15
〈シリーズ〉教育分野で活躍する卒業生 16
卒業生INTERVIEW 17
Tokyo College of Music Journal NEWS/TOPICS 18

来年、創立111年を迎えるにあたり
理事長×学長対談
懐古するだけに甘んじず 次の100年を念頭に抱いて

東京音楽大学は日本最古の歴史を誇る私立音楽大学で、その前身の東洋音楽学校は1907年に設立されました。以来、本学の卒業生は、ジャンルを問わず常に日本の音楽界をリードし、また、音楽を学ぶことを通じて社会に貢献する場を切り拓いてきました。2018年に創立111周年という節目を迎えるにあたり、本学学長と理事長にお話をうかがいました。

歴史の厚みによる恩恵

学長　東京音楽大学は、この数十年間で飛躍的にレベルアップしてきたと思います。もちろん以前にも素晴らしい音楽家が各領域で活躍されていましたが、本学に限らず、昔の日本では、音楽大学を「習い事」の延長線として、ゆったりととらえがちな風潮があったように思います。とはいえ、重厚な歴史に支えられた本学は、これまでのべ2万人を超える卒業生を輩出し、彼らは、今の世代の若き音楽家たちが日々切磋琢磨することを、心から喜んで支援・応援してくれています。その層の厚さと熱き情熱は、現役の学生たちや将来入学される方々にとって、本学ならではの貴重な礎となっています。

理事長　諸先輩が築いてくださった伝統により、本学には常に素晴らしい音楽家、指導者の方々が集まっています。現在の学生たちに「習い事感」はまったくありません。むしろ、演奏家への道から一般就職まで、それぞれ異なる選択肢の中から、自分が進む道を、4年間、音楽と教養を学ぶことを通じて決断しなければなりません。このため、東京音楽大学の学生たちには、独自の力を発揮できるようになるのです。

音楽を通じて人間の本質を学ぶ

学長　私の教え子にもいますが、卒業して十数年たってからも音楽の恵みを改めて感じ、地元で積極的に音楽活動を企画している卒業生も多いんです。音楽だけで生計を立てていなくとも、その恩恵は一生続くもの。それを大学4年間で知り、身につけることで、人間として立派に成長するわけで、「人間教育としても音楽はとても有意義なことだ」と痛感しています。もちろん、音楽大学では演奏技能や音楽理論の習得は不可欠ですが、それを通じて得るものが自分の身体に入り込んでいくことを、人生で最も感受性が強い、若いうちに実感していただきたいと思いますし、その「音楽の恵み」への実感は人生の歩みと共にますます深まっていくことでしょう。

理事長　音楽を勉強するだけではなく、「音楽への探求を通じた人間教育」を具現化したのが、2017年4月に新たに開講した新専攻の「ミュージック・リベラルアーツ専攻」です。そして、そこで学ぶ内容、目的は同専攻の学生たちだけにあるものではなく、本学の全学生に向けてその理念を開示するものであり、ひいては、老若男女を問わず、すべての人間に学んでいただきたい内容だと思っています。それは、しばしば「教養科目」と称されるリベラルアーツですが、私はそれほど単純な学びではないと考えています。音楽は人間が演奏し人間が聴く、まさに「人間が創り上げ、人間が解釈する芸術」です。だからこそ、医師にとって芸術が必要なように、音楽家にも科学や哲学、経済や歴史に関する知識と、それらを通じて人間を考える力が必要なのです。

「自分が進む道を、自ら判断し見極め、選択して歩んでいく」人間力がしっかりと身についていると思います。その点、一般的な総合大学よりはるかに厳しい環境の中で、学生たちは、それぞれ個性的な自己を確立し、社会のいかなる領域に身を置こうと、自分

学長　音楽には、それがなければ人間は生きていけない、不思議なパワーが秘められているようです。以前、アメリカで演奏した際、月に行ったある宇宙飛行士と出会い、とても興味深い話をうかがいました。「完全な沈黙、無音状態の宇宙では、水と同様に音楽がないと生きていけない」というのです。宇宙空間で音楽の真理の存在とそのパワーを確信した彼は、それ以来、熱烈な音楽愛好家になり、支援者にもなっているんです。

新キャンパスの開校

理事長　池袋キャンパスの一部施設の老朽化という物理的な理由が、新キャンパス開校に踏み切る直接的なきっかけとなりました。正直なところ、現キャンパスの一部は建て替えなければならないタイミングを迎えたわけですが、現キャンパスの敷地内で建て替えると、法規制から床面積が半分になってしまう。そのため新キャンパスの候補地を探していたところ、中目黒・代官山という音楽芸術と親和性の高いエリアに出会ったわけです。

学長　今の南池袋は、「雑司ヶ谷 鬼子母神堂」が象徴するように、都会でありながら歴史の重みを感じる閑静な街。一方、中目黒・代官山の新キャンパス周辺は現代的で洗練され、きわめて発信性の高いエリアです。現キャンパスと新キャンパスの融合は、学生たちにとっても、とてもいいコンビネーションだと思います。

理事長　「両キャンパスで音楽とリベラルアーツをじっくり学び、代官山・中目黒でその成果を世界に積極的に発信する」という図式が考えられるでしょう。そのためにも、新キャンパスには最新のデジタル技術を駆使できるレコーディングスタジオも設置。商業音楽を専攻する学生のみならず、クラシック音楽を追求する学生たちにも、ぜひ積極的に利用して、自分が考える音楽を通じたメッセージを世界中に発信してほしいと思っています。

学長　東京音楽大学は、楽器や練習施設など音楽を学ぶ環境は非常に充実しています。これに、中目黒・代官山キャンパスが加わることにより、ますます教育と学びの環境は充実します。ここまで恵まれた教育環境には、なかなか出会えないと思います。

新ロゴの設定

理事長　110年の実績に支えられ、東京音楽大学と海外の音楽教育機関や音楽家とのやり取りは、ITメディアの普及も相まって現在ますます頻繁になり、本学の知名度は格段に向上していると感じています。そうした現実を鑑み、東京音楽大学のビジュアルアイデンティティをより効果的に、論理的に訴求していこうと考え、「TCM」というコーポレートロゴを正式に決めました。実は海外の方が本学にコンタクトされる際、もともとTCMと記述されることが多かったんです。今後は、日本国内においても「TCM」＝「東京音楽大学」と誰もが直感的に認識するように、幅広くこのロゴを使用していきたいと思っています。

学長　我われは、今後も常に「教育の質」を考えていかなければなりません。それは決して教員だけで成就できるものではなく、事務職員や学生たちも含めて、東京音楽大学全関係者が一致団結してこそ可能になるものです。我われがアイデンティファイするための一つの契機として、今回の新ロゴ設定はとても有意義だと思います。

創立111周年を迎える意味

理事長　2017年5月をもって、東京音楽大学は創設110年目に入りました。しかし、110年という年月はもちろんきわめて貴重で稀有な財産ではありますが、それはあくまでも過去の積み重ねに過ぎません。

東京音楽大学とそこに学ぶ学生にとり最も大事なことは、過去の実績の上に立つ「未来」です。その意味からも、本学関係者の皆さんには、「東京音楽大学の新たなるスタート」としての111周年を、ぜひ強く意識していただきたいと願っています。

理事長 鈴木 勝利 *Katsutoshi Suzuki*　　学長 野島 稔 *Minoru Nojima*

創立111周年事業プロジェクトが始動

■中目黒・代官山新キャンパス

着々と順調に進む建設工事

東京音楽大学は、創立111周年記念事業の中核として「中目黒・代官山新キャンパス計画」をスタートし、2019年4月の開校に向け、順調に工事が進んでいます。

美しい緑に溶け込む新キャンパスには、最高水準の音響効果が期待できる、使用用途に合わせた大中小の各種レッスン室が80室以上できるほか、最先端の録音・映像収録設備を擁するスタジオやオーケストラ・吹奏楽などの合奏授業専用の特大教室、座席数約400席のホールも誕生します。また、学外との共同学習も可能なクリエイティブラボやカフェレストランなども完備する予定です。

これらの充実した環境により、本学の学生たちによる音楽の研鑽とその成果の発信がこれまで以上に盛んになり、加えて音楽を通じた社会貢献も活性化するものと期待されています。

コンサートホール（イメージ）

新キャンパス工事風景（2017年6月撮影）

■コーポレートロゴ・コーポレートタイプ決定

コーポレートタイプ

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

コーポレートロゴ

TCM

新たなるスタートへの決意表明

これまでの東京音楽大学では、論理的に統一・体系化された、ビジュアルコミュニケーション活動をなかなか図ってこられませんでしたが、本学の未来、次の100年に向けたメッセージのシンボルとして、このたび、正式なコーポレートロゴとコーポレートマークが決定されました。今後はルールに従ってあらゆるコミュニケーション活動において使用し、幅広く積極的に普及を推進することで、本学のアイデンティティをより確固なものにするものと期待されます。

東京音楽大学の英文略式表記である、「TCM」をベースにデザインされたコーポレートロゴは、「Tokyo＝東京、College＝大学、Music＝音楽」が、重なり合い、融合し、共鳴していく様を表現したもの。本学が、音楽芸術のみならず、「様ざまな分野との垣根を払拭して多様性を許容」し、「現代社会と共存共栄」し、「培われた伝統を忘れることなく、新しい変化を迎え入れ」、「時代と共に進化成長していく」ことを宣誓し、「音楽への尽きることない探求と研鑽を通じて、未来の新しい価値を創造し続けていく決意」を表現しています。

■創立111周年オペラ公演 歌劇『ラ・ボエーム』

粟國 淳 客員教授 *Jun Aguni*　広上 淳一 教授 *Junichi Hirokami*　釜洞 祐子 教授 *Yuko Kamahora*

東京音楽大学は、1990年以来、5年ごとに周年オペラを公演してきました。来年、創設111年を迎えるにあたり、本年10月21日（土）・22日（日）に創立111周年記念オペラ公演 大学院「オペラ特殊研究」発表 歌劇『ラ・ボエーム』全4幕を上演します。本番に向けて、日々熱心に指導にあたられている先生方に、作品の見所や意味をうかがいました。

オペラ歌手への険しい道

釜洞　今回の目的は、あくまでも授業の成果を披露することです。『ラ・ボエーム』は、19世紀末の初演以来、誰もが名を知るポピュラーな歌劇。そこには若き芸術家たちの希望と現実、喜びと悲しみが実に繊細に描写されています。学生たちには、作品から感じることを自らの声で表現し、オペラ作品を完成させるためには歌い手が何を担わなければいけないのか、身をもって学んでほしいと願っています。

粟國　オペラ歌手への道はとても険しいものです。演劇や舞踊の要素に加えて、「歌」「声」をも磨き上げなければなりません。しかし、声を創りあげるのには長い年月がかかり、卒業してからでき上がる人も少なくありません。10歳前後で資質を見極められる役者やダンサーと比べて、デビューのタイミングに10年以上の隔たりがあるわけです。そのため、先生方が自身の実体験をもとに教示するアドヴァイスは、学生たちには極めて重要になるのです。

『ラ・ボエーム』からの学び

釜洞　声楽専攻の大学院生だけでなく、オーケストラの器楽専攻の院生、また学部生から付属幼稚園の園児たちまで、私はこの舞台を創り上げる一人ひとりが、音楽との向き合い方を見つけるきっかけになってほしいと思います。そのために、驚くほど多くの先生方が布陣し、週2回、月曜日は音楽稽古、木曜は舞台・演出稽古を続け、かつ本来の個別のレッスンもあり、その指導は本当に細部に至るまで行われているんです。

粟國　登場人物たちは演じる学生たちと同世代。また同様に芸術家として未来の扉を開こうと切磋琢磨する日々を送っています。そして作品には、「夢や希望だけでは生きていけない。愛だけでは人を救えない」という、「現実の厳しさと人間の無力さ」が彼らの叫びとして描かれている。オペラでは仲間の一人が亡くなり終演となりますが、実は、原作ではその後、登場人物たちは離別しながらも成功していきます。彼らは悲しい現実を乗り越え克服するのです。それを学生たちが自らに投影すれば、「音楽家として壁や問題に出会う時、己がそれに対峙して克服しなければならない」という教訓にもなると思います。

広上　今回の公演は非常にクオリティの高いものに仕上がるはずですが、それはあくまでも学生の「発表会」。将来、「実際にプロの現場に踏みこんで、初めてそのレベルの高さに気づく」という、厳しい現実に出会うことでしょう。学生たちが少しでも早くそうした事実に気づくためにも、プロの音楽家として指導する我われは、周年という節目のみならず、日々恒久的に学生たちを見守らなければなりません。我われの時代とは異なり、今の学生たちはとても手厚く擁護されています。しかし、若いうちにはさまざまな軋轢を耐え忍ばなければいけないのも確かです。出演者、演奏者、観客、どのような立場でも、今回の上演を通じて、人生における葛藤とその意味を考え、将来の自分を見つめるきっかけとなることを願っています。

2012年公演より

ミュージック・リベラルアーツ専攻 開講

リベラルアーツの真理を学び自らのメッセージを伝播するツールとして英語を学ぶ

音楽の演奏技能と共に人間や社会、自然について洞察する、日本の音楽大学として初の「音楽・語学・教養」融合型専攻、『ミュージック・リベラルアーツ専攻』が本年4月に開講されました。まだ先輩も後輩も存在しない第1期生としてのプレッシャーを克服しながら、新入学の1年生18人と転専攻した2年生2人が、その恩恵を享受しながら日々研鑽を積んでいます。

本専攻の1年次のカリキュラムでは、2年次から学ぶリベラルアーツをより本格的に深く探求するためのスキルとして、実技レッスンを中心とする音楽科目とともに、英語を徹底的に学びます。その特徴や意義を担当教員の方々にうかがいました。

教員からのメッセージ

「英語担当」

Midori Takeishi

武石 みどり 教授

アカデミック リーディング

英語で音楽を学ぶ有用性

1年次の必修科目「西洋音楽史 アカデミック リーディング」では、海外で使用される標準的な教科書をスピーディに読みながら、「クラシック音楽の基本的な概念」と「音楽領域における英語表現」の双方を学んでいます。

それらを学ぶ上で特に重要なポイントは、「執筆者の英文メッセージを的確に把握・理解し、それを日本語で正確に表現する」「わからないことは、最も適切な参照先を選択し、自ら率先して調べる」「取得した情報を整理して理論構築する」という、学術的な考え方と方法論を身につけること。これらを身につければ、2年次から本格的にリベラルアーツを学び、多くの知識を吸収する機会を持っても、それらを論理的に整理した上で分析し、自分なりの考えを築き上げることができるようになります。

また、思考プロセスが異なる英語と日本語の表現方法を相関的に学び、一つのことを多角的に見つめ、さまざまな方法で表現する術を持つことは、音楽表現にも幅を持たせるはずです。将来、社会に出た時にもフレキシブルなコミュニケーションを可能にするでしょう。加えて専門的な音楽知識を活用すれば、音楽分野を専門とする通訳や翻訳家にもなれると思います。

自分自身の経験からもいえることですが、海外で学ぶ際には、語学的なハンディキャップはまったく無視され、授業はどんどん進められていきます。事前に配布され必死に読み込んだ、膨大な資料に対する自分の理解が正しいのか否か、毎回とても不安に感じますし、かなり違っていることもあり得ます。皆さんが将来留学した際に、想定外のそうした状況に陥らないように今から準備することも、この授業の役割の一つかもしれません。

クラシック音楽の概念や、そこに脈打つ歴史的・文化的なエッセンスを英語で学ぶカリキュラムは、日本ではあまり例を見ない、アカデミックでありかつ実践的なものです。本専攻の皆さんが、ここで得るものを積極的に享受し、ぜひ将来の活動領域を幅広く有意義なものにしていただきたいと思っています。

Sara Kuroki

黒木 セーラ 講師

アカデミック ライティング

アカデミックな英語とは？

「音楽の魅力の一つは、演奏、音で人とつながること」だと学生たちは言います。英語は海外の人たちと音楽について自由に語り合い、触発し合うための大事なコミュニケーションツール。瞬間的に話す会話能力ももちろん重要ですが、まずは「自分のメッセージを誤解されないように何度でも修正でき、相手に正確に伝えられる」ライティング能力の習得が、その第一歩だと思っています。

一般的に日本人は、「自分は英語が不得手」と思いこみがちですが、それは大きな錯覚です。実際、私のクラスの学生たちも、自分たちが愛する音楽や楽器に関しては、授業開始当初から十分英語で書くことができました。ただし、この授業の目的は「読み手が『うまい』と感じるアカデミックな文章を書く」こと。カジュアルな文章レベルを超越しなければなりません。そのための英語表現を、言葉遣いはもとより、センテンスやパラグラフの論理的な構成まで、実践的に指導しています。

「アカデミックな英文」は、「難しい単語を使った文章」や「長文」である必要はありません。すでに学生たちは、『『シンプルな文章』で書き始め、それらを論理的に組み合わせて構成したほうが、理解されやすく効果的」と学んだようです。日本語の「起承転結」同様、文章全体のストーリーと、それを構築するためのプランニングが一番重要ですが、そこには音楽との共通点が多々あります。ライティングは作曲、会話は演奏と思えば、音楽を専攻する学生たちには理解しやすいのかもしれません。

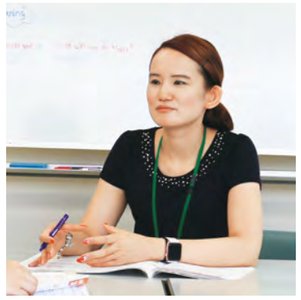
Himnie Banno

伴野 ヒニー 講師

チュートリアル イングリッシュ

実践的な英会話力の習得

「チュートリアル」とは「家庭教師のように個別指導する」ことを意味します。Tutorial English



は1名の英語ネイティブ講師につき学生最大4名のクラスで、週2回英会話のレッスンが行われます。少人数のため、積極的に参加することが求められ、そこでは、ロールプレイやペアワークを通じて、高校まで学習してきた文法の知識や語彙力を活性化させます。学生は毎回のテーマに沿ったフレーズを繰り返し練習することで、きわめて実践的な英語力を身につけることができるのです。

日本人は会話を発展させたり、自分の意見をストレートに伝えることが苦手な傾向にあります。Tutorial Englishを通じて、大学1年生のうちから文化によるコミュニケーション方法の違いを学ぶことは、将来留学する際にも役立つでしょう。

教員からのメッセージ

「実技担当」

Katsunori Ishii

石井 克典 教授

音楽も英語もメッセージがあってこそ

今や、音楽大学で海外の素晴らしい先生方に通常のレッスンも担っていただける時代。学生たちの英語力の向上は、その際、指導者とのより直接的なコミュニケーションを可能にし、音楽への理解と演奏技能の上達に大きく貢献するでしょう。また、メール等により、レッスン時以外に人間としてのアドヴァイスを求められることもアドヴァンテージだと思います。

ただし、英語力の習得だけが本専攻で目指すゴールではありません。英語は伝達手段にすぎず、それを使って発信するメッセージを、音楽大学生として追求することが最終目的です。演奏も英語も、「発信したい」と願う、自分の内面にある意思や欲求があってこそ意味を持つもの。それらは必ず有機的・相乗的に機能するはずです。本専攻では、それらが同じプロセスで上達していくさまを経験できるでしょう。まだスタート地点に立ったばかりですが、今から学生たちが卒業する時の姿をイメージし、とても楽しみにしています。

在学生INTERVIEW

松岡 真里奈さん

小学校3年生の時にドイツのコンクールに出場し、語学力を身につけたいと痛感しました。以来、ピアノと英語をしっかりと学び、音楽で世界と関わりたいと思い続け、本専攻を選びました。ピアノの練習と高度な内容の英語や他の勉強との両立は大変ですが、深く学べることは喜びです。先日フランスの友人に英語の上達を認められ、授業のありがたさを実感しています。

中出 さらさん

9歳の時に鈴木秀美先生と出会い、私もチェロと共に世界を巡りたいと思い、本学付属高等学校に入学しました。西洋音楽を学ぶ上で大切になるのはローカル言語ですが、私にとってその第一歩が英語。文化や歴史への教養も必要と感じ本専攻を選びました。入学前に可能な限り実技と英語を準備すると、本専攻ならではの学びをより多く享受できると思います。

多田 韻可さん

ピアノ以外にも多くのスキルを身につけようと考え、本専攻に進みました。実践的な授業で身につくネイティブの英会話表現と、プレゼンテーションやライティングなどアカデミックな英語能力、その両方を習得できるのが大きな魅力です。ほとんどの授業が英語だけで進められるため、英語力の必然的な向上を毎日実感しています。

東京音楽大学ならではのマスタークラス

パーヴォ・ヤルヴィ *Paavo Järvi*

Profile

2015年9月、NHK交響楽団首席指揮者就任。2017年春には、N響とのヨーロッパツアーが行われ、各地で大成功を収めた。これまでにロイヤル・ストックホルム・フィル首席指揮者、シンシナティ交響楽団音楽監督、hr交響楽団首席指揮者、パリ管弦楽団音楽監督などを歴任し、現在ドイツ・カンマーフィル芸術監督、エストニア国立交響楽団、エストニアのパルヌ音楽祭とヤルヴィ・アカデミーの芸術顧問を務めている。さらに欧米の著名オーケストラにも客演を重ね、現代を代表する指揮者として世界的に活躍。1962年12月30日、旧ソビエト連邦タリン（現エストニア）生まれ。

2016年に引き続き、本年6月22日（木）、東京音楽大学特別講座「パーヴォ・ヤルヴィ～指揮公開マスタークラス～」が本学A館100周年記念ホールにて開催されました。受講者はオーディションを通過した、本学指揮専攻の学生をはじめとした4人。会場を埋めつくした聴講者から熱い視線が降り注がれる中、それぞれがベートーヴェン『交響曲 第4番 変ロ長調 作品60』の楽章ごとに指揮し、パーヴォ・ヤルヴィ先生から心温かいアドヴァイスを授かりました。

広上 淳一 教授 *Junichi Hirokami*

幸いにも、昨年開催した講座が好評を博し、今回の第2回目を迎えることができました。4人の受講生はもとより、オーケストラで演奏した本学の器楽専攻生たちや、聴講された皆さまままで、その場を共有されたすべての方々が、パーヴォ・ヤルヴィ先生の卓越した指揮のエッセンスと音楽への情熱のほんの一部でも感じ取り、音楽の深遠さを理解していただくきっかけとなれば、とてもうれしく感じます。

マスタークラスを支えた方々

今回の課題曲はなかなか難しい曲でしたが、登壇した受講生たちは、自分がどの楽章を振るか事前に知らされていなかったのにもかかわらず、皆さん必死によく頑張ったと感じています。また、オーケストラを奏でた、本学器楽専攻の諸君の演奏も立派でした。指揮者の役割は、演奏者が存在して初めて成立します。演奏者たち自らも楽曲を理解し、入念にさらって演奏に臨んでこそ、パーヴォ先生の指揮にしっかりと反応でき、音の違いがより明確に伝わるのです。もちろん演奏した学生たちも、先生の指揮から必ず何かを掴んだはずです。その貴重な経験に触発され、これからもさらなる日夜研鑽を積んでいくことでしょう。

また、通訳の方も非常に素晴らしかったと思います。機械的に日本語に置き換えるのではなく、「パーヴォ先生の言葉だけでは聴き手が理解できない」と判断した際には、瞬時に的確な解説を付与しながら訳していく姿には、プロの通訳者の実力を思い知らされました。そして、それは音楽に対する深い造詣を持っているからこそ。「音楽を通じて学んでいくものは、演奏家に限らず、さまざまなシーンで存分に発揮できる」ということを、身をもって本学の学生たちに教えていただいたのではないでしょうか。

本学が擁する寛容性

このマスタークラスの様子は、NHKEテレのクラシック音楽番組、『クラシック音楽館』で2回にわたって全国放映される予定です。若き音楽家の卵たちが、緊張し、動揺しながらも、限られたチャンスの中で何かを掴んでいこうとする姿は美しいものです。その姿に感動や共感を抱き、クラシック音楽への興味を抱く視聴者が増えれば、この企画は成功したといえるでしょう。

今回の催しの基本は、あくまでもNHKの番組企画とその収録です。東京音楽大学の立場は、「その趣旨に賛同し、収録場所や人的な面で協力した」という位置づけにすぎません。しかし、本学には、学生であれ、メディアであれ、音楽の素晴らしさを伝えるためには積極的に協力・応援する、「柔らかな心」を擁する土壌があるのです。そこで教える教員の一人として、また卒業生として、私はそのフレキシブルな精神を誇りに思っていますし、そうした土壌だからこそ、本学はこれからも音楽への学びを通じて、多種多様な領域で活躍する、人間力豊かな人材を輩出し続けていくものと期待しています。

受講生

太田 巡さん *Meguru Ota*

指揮　大学4年

今回は、自分の実力を試すためにオーディションを受けました。指揮に関してはオーディションの機会自体がもともと少ないため、それだけでも貴重な経験だったと思います。昨年のマスタークラスでは先輩が受けるレッスンを聴講しましたが、自分が受講するのは初めて。本番まで自分が振る楽章も知らされず、客席にずらっと並ぶ指揮科の先生方の姿を見つけたこともあり、はじめはひたすら緊張しましたが、パーヴォ・ヤルヴィ先生の指導により、音が見事に変わるさまを実感していきます。そして、わずか30分程度の短い時間の中、自分の曲に対するイメージや指揮に対する考え方が、瞬く間に変わっていくんです。あっという間にレッスンが終わった時、「やっぱり音楽は楽しい！」と心から思う自分がいました。

受講生が共通して先生から指摘されたのは、「ビートを刻むことにとらわれている」ということ。「優秀な演奏者たちには常に細かく刻む必要はなく、フレーズに即して振ったほうがいい場面もある」とアドヴァイスされ、「演奏者に任せる場所と指揮者が支える場所」という、楽曲の構造と指揮者の役割を明確に示していただき、とても参考になりました。

演奏者とのやり取りは譜面上だけでは学べません。幸せにも本学の指揮科の学生は、『合同レッスン』の授業でもオーケストラと共に学べます。今回学んだことを、早速そこで試してみるつもりです。

コンサートミストレス

金子 英梨歌さん *Erika Kaneko*

ヴァイオリン　大学4年

今回のマスタークラスは指揮者を目指す方々のためのものでしたが、私たち演奏者にとっても、それは一生忘れられない大切な思い出になりました。パーヴォ・ヤルヴィ先生がタクトを振られた瞬間から、自分が奏でる一音一音に先生のエネルギーが注がれて、自分の身体が勝手に演奏しているような、不思議な感覚に包まれていくのです。演奏者全員がそんな至福の時間を共有し、「皆、音楽のことがますます好きになったに違いない」と、今でも確信しています。私自身、今回のマスタークラスで演奏して以来、音楽と共に幸せな毎日を送っていることに改めて気づき、これからの覚悟・決意を持つことができたように思います。

音楽は皆で創り上げていくものです。自分だけが楽しく弾いてもそれは実現できません。自分自身が愛情を込めて、音楽そして一緒に演奏する仲間と向き合うことを意識して今回も臨みました。それをパーヴォ先生にも感じていただいたようでとてもうれしく思いました。それも本学ならではの授業の賜物でしょう。私たちは、授業でフルオーケストラを学ぶことができ、さらにそこでは弦楽器の先生だけでなく、管楽器や打楽器の先生方からも指導いただき、いろいろな方向から学ぶことができます。そして先生方からは、まさに音楽への愛がひしひしと伝わってくる東京音楽大学は、私にとって本当に贅沢な環境だと感じています。

※このマスタークラスの様子は、NHKEテレ『クラシック音楽館　指揮者への道～パーヴォ・ヤルヴィ特別レッスン～』で、前編8月6日（日）（22時36分頃～23時00分）、後編8月13日（日）（22時45分頃～23時00分）の2回にわたって放送される予定です。

器楽専攻 ピアノ

ファルカシュ・ガーボル *Gábor Farkas* 教授

Profile

ハンガリー国立リスト音楽院卒業後、修士課程、さらに博士課程を修了。その後イタリアのコモ湖国際ピアノアカデミーを経て、2009年のワイマールにおける第6回国際フランツ・リストピアノコンクールに優勝したのをはじめとして多くのコンクールに入賞。2012年にはリスト賞を受賞し、リスト音楽院で後進の指導にも当たっている。2016年ニューヨークカーネギー・ホールデビュー。2008年にはデビューCD『リストの夕べ An evening with Liszt』をリリース、リスト協会によってグランプリを獲得した。その他多数のCDをリリース。

「曲に秘めた作曲家からのメッセージを自ら解釈し、音で届ける芸術が音楽」

2014年から東京音楽大学で毎年マスタークラスを担い、この大学のフレンドリーな気質、学生たちの素晴らしい才能と真摯に音楽を学ぶ姿勢に心を動かされてきました。今年4月から特別招聘講師としてではなく、正式教員として貢献できることを誇りに思っています。

作曲家からのメッセージを知る

音楽を学ぶ日本の学生たちには、ヨーロッパ文化を積極的に学んでいただきたいと思っています。例えばリストの曲を演奏する学生には、彼が作曲した時代のヨーロッパの文学や歴史的な背景もぜひ研究してほしいのです。それらは必ず曲に影響しています。それらを知らなければ、「リストが何を表現したかったのか?」「なぜその曲を書いたのか?」理解できません。また、皆さんがピアニストを目指していても、他の楽器とのアンサンブルはもとより、交響曲や室内楽、リートなど、ピアノ曲以外のカテゴリーの作品も研究した方がいいでしょう。特定ジャンルの曲しか聴いていないと、曲の本質はわからないものです。視野を拡大して見つめてこそ、初めて曲の真の姿、作曲家からのメッセージが見えてきます。

レッスンで示すのは例にすぎない

演奏家を目指す際には陥りがちですが、テクニックは最優先課題ではありません。ハンガリーの学生たちの間でも、自分が好きなピアニストの演奏スタイルをまねするケースが少なくありませんが、他人の演奏をコピーすることはまったく無意味です。まず重要なことは、「楽譜を徹底的に研究し考えてから、自分の心、感情を注ぎ込む」こと。そうしたアプローチを実践してこそ、初めて皆さんの演奏は成立し、意味を持つのです。レッスンで私は、学生たちが自ら考え、結論を出すためのきっかけと選択肢を提示しますが、あくまでも一例にすぎません。それらをヒントに、自分にしか奏でられないオリジナルな演奏を、日々創造し続けてほしいと願っています。

また、人一倍練習することは必須ですが、長時間練習すればいいというわけではありません。オンとオフのめりはりをしっかり持ち、楽しみながら集中して練習するべきです。子供の頃、私にとって、ピアノの練習は一番楽しい〝遊び〟でした。私が悪いことをして親から与えられるペナルティは「ピアノを弾かないこと」だったんです。だからこそ、ピアノを弾ける至福の喜びを知れたのかもしれません。

作曲家も人間。神ではない

音楽は有機的な生きもの。「演奏者の心で理解・解釈した作曲家のメッセージを、聴衆の心に直接投げかけて届ける芸術」が音楽なのです。もっとも重要なポイントは「偉大な作曲家たちも神ではなく人間だ」ということです。彼らの人間的な思いや感情を理解しなければ、その曲に込められたメッセージはわかりません。日本人が音楽を学ぶ際には、その礼儀正しさゆえに、教える側と学ぶ側の間にある種の距離が存在しているように感じます。しかし、音楽にはそれを打ち破る力があります。ハンガリー人の私と、日本人である皆さんがお互いに近づき、理解し合ってこそ、音楽の本質、作曲家からのメッセージが見えてくるのではないでしょうか。それらを少しでも理解いただければ、私にとって本学で教える意味が生じるでしょう。

作曲指揮専攻 作曲「ソングライティングコース」

Shusui 客員教授

Profile

Shusui(周水)1976年1月30日生東京都出身。
生まれつき目に障害を持っていたこともあり、両親の勧めでクラシックピアノを習い始める。文化学院を卒業後ロンドンへ留学。帰国後cannaを結成。Sony Recordsより『紙ひこうき』でメジャーデビュー。外国人クリエーターとのコラボレーション作品を国内外へ提供。『青春アミーゴ』(修二と彰)がオリコン年間シングルチャートの1位を記録。自らの子育て体験を元に育音(Iku ON)プロジェクトを設立しボランティア活動を開始。2015年10月小学館よりCD付き絵本『アフリカゾウのなみだ』を出版。

「音楽への情熱がみなぎる環境の中、〝究極のコミュニケーション〟を学んでほしい」

DTMの制作技術を学ぶ場ではない

現代の音楽創作活動において、コンピュータはもはや不可欠なものになりましたが、本学ソングライティングコースはDTM(デスクトップミュージック)の制作技術を学ぶ場ではありません。本来、音の波形が読めなくとも、カセットテープレコーダーで鼻歌を録音しながらでも、貪欲な目的意識を持ってさえいれば、誰にでも作曲活動はでき得るものです。コンピュータは筆記用具、ツールにすぎないんです。日常生活の中でONにしたアンテナから得る刺激を受けとめて解釈し、それを自らの楽曲として具現化し、積極的にプレゼンテーションする術を学ぶ場所が本コースです。

五感を駆使して感じ、表現する

ここで学ぶ学生の皆さんには、とにかく〝引き出し〟を増やしてほしいと願っています。そのためには、自分が興味を抱く曲と出会ったら、そのアーティストの作品をデビューまでさかのぼってすべて聴いてみたり、レコーディングやライブに参加しているほかのミュージシャンについても研究したりする。そうしたアプローチによって、あなた方はその1曲から得るものの何百、何千倍もの情報を得ることになります。そしてそこには、曲を創り上げていく上でのヒントが必ず数多く見つかり、それらが自分の作品の「血や肉」になる筈です。

今や、インターネット上で数回クリックするだけで、自分が求める音楽や映像情報にたどり着ける時代です。そこには以前のように歌詞カードを何度も読み返すシチュエーションが広がっている訳ではありません。もちろんそうした〝クイック・アプローチ〟は決して悪いことではなく、音楽に日常性を付加してくれるはずです。しかし、だからこそ、音楽を学ぶ皆さんには精神的にもショートカットして音楽と向き合うのではなく、日夜音楽に寄り添いながらとことん探求し、自らの五感を駆使して感じ、表現していただきたいと思うんです。

音と言葉を融合させる究極のコミュニケーション

また、どんなに素晴らしい楽曲を創り上げても、それを発信する術や環境づくりを知らなければ自己満足で終わってしまいます。現代の商業音楽は、音と言葉を融合させる究極のコミュニケーションの一つ。自分の作品には必ず、受け手であるオーディエンスが存在します。加えて、これからはCo-Write(コライト)するシーンもますます増えていくと思いますので、授業では〝コライトキャンプ〟的な要素も設けていますが、一緒に共同制作する仲間たちはライバルであり、かつ、もっともシビアなオーディエンスです。彼らとコミュニケーションを図り、さまざまな葛藤を乗り越えながら作曲していくのも、きっと貴重な経験になるでしょう。

幸いにも、東京音楽大学には、専攻や楽器にかかわらず、クラシック音楽を追求する多くの優秀な学生たちが集まります。彼らの音楽に対するスタンスと奏でる生音からも大いに刺激を受け、私に限らず我われ教員たちのことも大いに利用してほしいと思います。私も日々、ジャンルを問わず、本学の学生たちの熱いパッションに触発されています。

2018年度から生まれ変わる『声楽専攻』

本学声楽専攻は、さらなる充実を目指し、来年度よりカリキュラムを大幅に変更します。新体制では、1年次に基本的な発声法と共に舞台表現の初歩を学べ、2年次からは『声楽芸術コース』と『声楽特別演奏家コース』に分かれて、オペラや歌曲をより専門的に学びます。

教員からのメッセージ

今回の改変の目的は、「歌が本当に好きな方々に、それを追求するための『可能な限りのチャンス』を、『全員』に用意しよう」ということ。そのチャンスは「時間」と「内容」、双方の面で拡大されます。

時間軸におけるチャンス拡大

これまでは、入学試験のレベルに準じて「声楽演奏家コース」と「声楽」、二つのコースに分かれて歌を学んできました。しかし、声楽は人間の身体が直接楽器になるため心身の成長が大きく影響し、入学時はいわば「原石」の状態。もちろん入学試験の際に可能性の有無は探りますが、重さやサイズを測定するだけでは、その石に潜む、光り輝く資質の全貌は見えない可能性もあり得ます。しかし、一度磨き始めれば、それはある時から必ず輝き始めます。我われは入学後に人間として成長し、格段に歌がうまくなる学生を、これまで数多く見てきました。そのため、入学試験の合格がスタートラインではなく、入学後の1年間、まずは「声楽芸術」に所属し、学生全員が同じ立場で歌を学び、その習得状況に合わせて、2年次からのコースを決めたいと考えたのです。

一見、それは入学時の間口が広がっただけのように感じるかもしれません。しかし、皆が平等に与えられた時間的な猶予を自分にとってプラスにするためには、より熟考し、自発的に切磋琢磨する毎日が要求されるでしょう。

コンテンツ面におけるチャンス拡大

今回の改革では、学生が目指す将来と巡り合うための「コンテンツ」を、入学時から多角的に用意します。例えばオペラに関しては、将来必要な知識や技能の〝インデックス〟として、これまでは大学院生しか受講できなかったバレエのレッスンをはじめとした身体表現や、感情表現、発想表現などの入り口を、『舞台基礎入門講座』で1年次から学べるようになります。

将来の選択肢はオペラだけではありません。本専攻で出会うさまざまなコンテンツに触発され、歌曲、ミュージカル、声優等、選ぶ道はたくさんあるでしょう。来年度から、本専攻の1年次―『声楽芸術』は、皆さんが「自分を見つめ、将来の夢を見つける」第一歩です。そのための術を習得し、生涯果敢に挑戦し続けていただきたいと思います。

新カリキュラム概要／授業内容紹介

入学 ▶ 1年次：声楽芸術 ▶ 2～4年次：声楽芸術コース／声楽特別演奏家コース ▶ 卒業

1年次

声楽芸術

- 1年次は全員が『声楽芸術』に所属となります。
- 基礎的な発声法などを学びながら、新設の「舞台基礎入門講座」で、舞台表現の初歩を学びます。

2～4年次

声楽芸術コース

- 本人の希望により、さまざまなジャンルの曲のレッスンが可能です。
- 「オペラ実習」の授業では、声楽家、演出家、指揮者による指導が行われます。
- 「歌曲・重唱」では、ドイツ、フランス、ロシア歌曲を基礎から学べます。

声楽特別演奏家コース

- 「特別実習」では、歌曲、オラトリオ、オペラのアリアやシーンを題材に、声楽家、指揮者、演出家の指導のもと高度で実践的な授業が展開されます。
- 2年次からの『声楽特別演奏家コース』の在学生は、学年末の定期実技試験の成績により決まります。

本学初の博士学位授与

東京音楽大学は、1993年4月に大学院音楽研究科修士課程を設置して以来、広く音楽界で活躍できる演奏家の育成と音楽教育者や音楽学研究者の養成に専心し、着々とその成果を上げてきています。

また、グローバル化と知識基盤社会が進展する21世紀において、高度な研究能力とその基礎となる豊かな学識を持つ音楽家、音楽教育者、音楽教育学研究者および音楽学研究者の果たす役割は極めて大きく、本学はこれらの人材の育成を目的とする「博士後期課程」を2014年4月に新設。3年間順調に研鑽を積んできた学生2名が、2017年3月18日(土)、本学初の課程博士として博士号を取得しました。博士学位論文および審査結果の要旨は、東京音楽大学リポジトリ(https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp)で公表しています。

博第1号 石岡 千弘さん　博士(音楽)

【博士論文題目】

「セルゲイ・ボルトキエヴィチ研究―自筆資料に基づく生涯・音楽観・ピアノ作品の考察―」

博第2号 鈴木 亜矢子さん　博士(音楽)

【博士論文題目】

「山田耕筰・別宮貞雄・團伊玖磨の日本歌曲―アクセント理論を起点とした分析的研究―」

初の「飛び入学」

INTERVIEW

太田 糸音さん

Shion Ota

ピアノ演奏家コース・エクセレンス

大学1年

私が「飛び入学」制度を知ったのは、付属高等学校に入学した直後のこと。誰もやったことがないことへの挑戦に魅かれる私は、すぐに興味を持ちました。私の学年が最初の対象のため、先輩からアドヴァイスもいただけず、不安要素も多々ありましたが、持ち前の〝大阪人パワーと情熱〟で乗り切った感じです。以前から、私は将来、少しでも早く海外留学したいと願っていました。ただし高校卒業と同時ではなく、「まずは日本でしっかり勉強し、確かな土台とさまざまな方向性を見極めてから」と思っていたんです。その点、東京音楽大学の「飛び入学」は理想的でした。その一方、そこにはリスクもあります。高校3年で習うはずの知識が前提の授業では、私にはわからないこともあるでしょうし、本学の途中で海外留学すれば、それまでの努力が無駄になる可能性もあり得ます…。しかし私はいつも「心が強い人間になりたい」と思っています。今後この制度に皆が関心を持つよう、一人目ゆえのプレッシャーと闘いながら挑戦していきたいと思います。

※本学への飛び入学は、現在、東京音楽大学付属高等学校のみを対象としています。

「New Connections 東京音大の学生による国際交流コンサート」　2017年6月15日　東京音楽大学A館100周年記念ホール

活発化する本学の交換留学制度

ここ数年、本学のキャンパスで留学生たちの姿を見かける機会が多くなりました。本学の学生たちにとって、彼らと交わり、我われとは異なる文化と出会うことは、自分の音楽を探し求めていく上でとても貴重なチャンスでしょう。それらを象徴する演奏会が6月15日(木)に開催され、その趣旨と演奏に惜しみない拍手を送られた皆さんに、お話をうかがいました。

交換留学生から見た日本

■**ローア 夏緒さん**（スイス出身　ザルツブルク・モーツァルテウム大学院在学　ヴィオラ）

東京音楽大学の学生は理論的にきちんと学んでいると思います。その一方で、私たちは自分が弾きたいように自由に弾きますが、日本の学生たちは先生からの教えに忠実すぎるようにも感じます。

（左から）ローア 夏緒さん、森山 一輝さん、ルカス・コルペライネンさん、佐藤 優さん、ランタアホ・エートゥさん（2017年6月16日）

■**ルカス・コルペライネンさん**（フィンランド出身　シベリウスアカデミー在学　作曲）

伝統楽器「ヨウヒッコ」で母国の伝統音楽を継承したいと思っていますが、異文化を知ってこそ見えるものが必ずあります。東京音楽大学では、邦楽やガムランを学び、昨年末の『合唱』の授業ではプロのオーケストラと共演もできました。ここでは多くの「初めて」を経験しています。

■**ランタアホ・エートゥさん**（フィンランド出身　シベリウスアカデミー大学院在学　作曲）

ある日、夏目漱石の『心』と出会ってから、日本に多大な興味を持つようになりました。今回演奏した、『定家の歌』は、日本に来たから作曲できた作品です。藤原定家の9つの和歌を取り上げ、中世の日本文化と現代のヨーロッパ文化を融合させ、自分のスタイルで表現できたと思います。

日本人から見た海外

■**森山 一輝さん**（2017年大学卒業　トランペット）

シベリウス音楽院に留学した時、日本よりも長期間、じっくりと音楽を勉強する風土に憧れました。そうした土壌で培われていく彼らの音楽と、我われ日本人の持つ感性がお互いに触発し合って、今回の演奏会が成立したと思います。

■**佐藤 優さん**（大学4年　ピアノ演奏家コース）

現地に留学した際、フィンランドの方々が心から音楽を愛していることを知り、私の音楽に対する考えは180度変わったように思います。今回のコンサートの曲合わせでも、彼らの音楽に対する一途な気持ちと情熱を常に感じてきました。

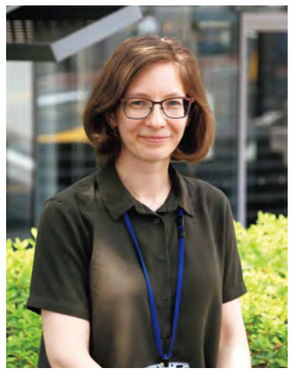
リスト音楽院より来日中

INTERVIEW

Edina Csalló

チャロー・エディナさん

学生支援課



私はリスト・フェレンツ音楽院の教務部国際留学生課に在籍し、2017年1月より1年間、同音楽院との連携サポートのために東京音楽大学に勤務しています。リスト音楽院には毎年120名前後の方が海外から入学され、その3分の1は日本人。子どもの頃に日本のアニメに興味を持ち、大学で日本の言葉と文化を学んだことが、今とても役立っています。

東京音楽大学とリスト音楽院の交換留学制度は2010年に締結されました。以来3人の学生が短期留学奨学生としてリスト音楽院で1か月間学び、ピアノと室内楽のレッスン、終了時のコンサートを経験してきました。今年の秋からは、逆にリスト音楽院の学生が東京音楽大学で学ぶ予定で、彼らにとっても日本独自の音楽や楽器など、異文化との出会いは貴重な経験になるでしょう。

シリーズ

東京音楽大学から世界へ

すべては本人次第 果敢に挑戦してほしい

Hidehiro Fujita

藤田 英大さん　テューバ　2000年大学卒業

Profile

2001年日本管打楽器コンクール第3位、2004年同コンクール第2位、2007年メルボルン国際テューバコンクール バリー・タックウェル賞（優勝）など、国内外のコンクールで入賞を果たす。2009年よりシンガポール交響楽団首席テューバ奏者に就任。2006年夏にソロアルバム『TUBA BUFFO』をテューバ界の巨匠ロジャー・ボボ氏監修のもとにリリース。2009年には2枚目のソロアルバム『TUBA FREAK』を、2013年と2015年にはバロック音楽のアルバム『TUBA POLYPHONICS 1&2』をリリース。

偶然出会ったテューバ

父はフォークソング、ジャズや映画音楽、母がクラシック音楽の愛好家だったため、実家にはさまざまなジャンルの音楽がいつも流れていました。とはいえ、幼少時にピアノのレッスンを始めたわけでもなく、水泳、剣道、ボーイスカウトと、きわめて〝男の子〟らしい毎日を過ごしていたと思います。そんな中、小学校の吹奏楽団に入団し、私は初めてテューバを手にします。本当はサクソフォーンやドラムを担当したかったんです。ただ、それらを希望する児童が多く、たまたま友だちが演奏していたテューバを選びました。以来今日まで、その温かく繊細、表現力豊かで人間的な音色に魅了され続けています。

ロジャー・ボボ先生の言葉が火をつける

小学校の卒業生楽団でこそテューバは吹いていましたが、中学時代は軽音楽部と剣道部を掛け持ちする毎日。ハードロックやメタル系が特に好きで、エレクトリックギターやベース、ドラムの練習に明け暮れ、卒業後はプロになろうと真剣に考えていた私でしたが、「音楽高校に行きたい！」と思い、東京音楽大学付属高等学校テューバ専攻を目指して猛勉強しました。念願が叶い入学してからは、幼い頃から音楽に取り組んできた同級生たちにカルチャーショックを受け、日々大いに刺激を受けたものです。そして、高校3年の初頭に現在の自分の道を決定づける機会に巡り合います。それはカーネギー・ホールでテューバ奏者として初めて単独でソロリサイタルを開き、20年以上ロサンゼルス・フィルハーモニック・オーケストラの首席奏者を務められた、ロジャー・ボボ先生との出会いでした。先生のマスタークラスを受講した際、「君は絶対もっと前に進んでいけるから」と評価され、テューバへの情熱に本格的に火がつきました。その後進学した東京音楽大学の4年間は、練習にひたすら打ち込みながら、他専攻の仲間たちと積極的に交わり、今の私の礎を形づくったと思います。

音楽を学ぶ皆さんへ

私は2009年より、シンガポール交響楽団首席テューバ奏者として演奏しています。国を問わず、オーケストラ団員になることは難しいもの。特にテューバの枠は一人です。私が採用された際の倍率は150倍。初心に戻り、一日8時間練習し続けました。自分の演奏を録音し、音程や音色の取り方を徹底的に研究する毎日でしたが、幸い努力が実り、現在に至っています。

もちろん、海外に出れば自動的に演奏技能が上達するわけではありません。すべては本人次第です。ただし、一度は海外で音楽を学び、音楽が育まれてきた歴史や空気を肌で感じ、同世代の音楽家を目指す若者たちの考え方を知ることは、とても有意義なこと。ぜひ皆さんにも果敢に挑戦していただきたいと思います。また、現在はアジアのみならずヨーロッパやアメリカの音楽大学でのマスタークラスやリサイタルを開くかたわら、在住日本人のアマチュア吹奏楽団も指導しています。東南アジア圏在住の日本人の間では、吹奏楽がちょっとしたブームなんです。私にとって聴衆でもある音楽愛好家の要望や考え方はとても参考になり、今後もSNS等を通じて、彼らとの接点を積極的に持っていきたいと思っています。

シリーズ

教育分野で活躍する卒業生

音楽教員だからこそ身をもって知る「音楽の力」

Mami Shimakata
島方 麻美さん
声楽　1985年大学卒業
埼玉県春日部市立武里中学校教諭

もう一度学びたいと願う大学

私を今の道に導いたきっかけは、中学1年次の音楽の先生との出会いでした。自らの身体を使って音楽表現を教えてくださったその姿に憧れ、「私も音楽が好きな生徒を増やしたい！」と強く思ったんです。その後、普通高校に進学しましたが、声楽の先生につきながら東京音楽大学を目指しました。

東京音楽大学は、「もう一度4年間学びたい」と今でも願う大学です。そこには、触発され、学ぶ意欲が高揚する素材が無限にあり、あらゆるカリキュラムに興味津々だった毎日。可能な限りの授業をとりました。ガムラン演奏の経験、三枝成彰先生の『和声』や小林研一郎先生の指揮でプロオーケストラと共演した『合唱』の授業の楽しさは、今も鮮明に覚えています。また、どうしても教員になりたかった私には、教職課程の先生方の熱心さ、手厚さがとてもありがたく、寝る間を惜しんで勉強したものです。

いい声で歌えるか否かは自分次第

これまで30年以上、埼玉県の市立中学校で音楽指導を担ってきました。現在の赴任先の部活動では、部員全員で吹奏楽と合唱に取り組んでいます。部員たちは吹奏楽を学ぶことで、歌の音程感が育ち、音色も身体で理解するようになります。以前、吹奏楽コンクール会場への移動バスの中、生徒たちが自分の楽器パートを全部歌えることがわかり、とても興味深く驚かされました。

声はほかの人には譲れない〝プライスレス〟な楽器です。その自分だけの楽器の音色は本人次第。日常生活や心のあり方さえ整えばうまくなり、逆に人の悪口ばかり言っているとアンサンブルもできなくなるんです。

音楽のパワーを実感

地域性もあると思いますが、ミュージカルに足を運ぶ生徒はクラスのほんのひと握りです。しかし、一度観た生徒は必ず感動し、「もっといい席でもう一度！」と願います。部活動でも、運動部ならグローブやラケットは残りますが、合唱の場合、ユニフォームのリボンかネクタイとシューズしか残りません。一方、ホール代や旅費等、見えないお金はいろいろとかかります。

しかし、大ホールの舞台上で歌う時の声の響き、歌い手を包み込む「音楽のパワー」は生徒の情熱を生み出し、暴走したがるエネルギーを発散させ、特別支援学級の生徒を歌えるように導きます。姿こそ見えずとも、音楽を奏でる経験は一生の財産として残ることを、私は身をもって知らされてきました。

生徒が挑戦する課題は難しいほうがいいかもしれません。入学時はたどたどしく歌っていた生徒たちも、卒業時には「メサイア」を歌えるようになっていきます。限界はないんです。そのためにも彼らにできる限りの機会を提供したいと思い、ヨーロッパの合唱団を招いてホームステイしてもらうなど、合唱を通じた国際交流も積極的に図っています。

クラス担任、音楽授業、部活動指導と、音楽教員という職業は決して楽ではありません。でも、最初の教え子たちも50歳近い年齢になりました。彼らの同窓会に呼ばれ、立派な社会人に成長した姿を見る時、すべての苦労は報われ、音楽の力、そして音楽教員という職業の醍醐味をあらためて実感しています。

偶然出会って以来、魅了され続けるチェロ。これからも貪欲に求め続けていきたい

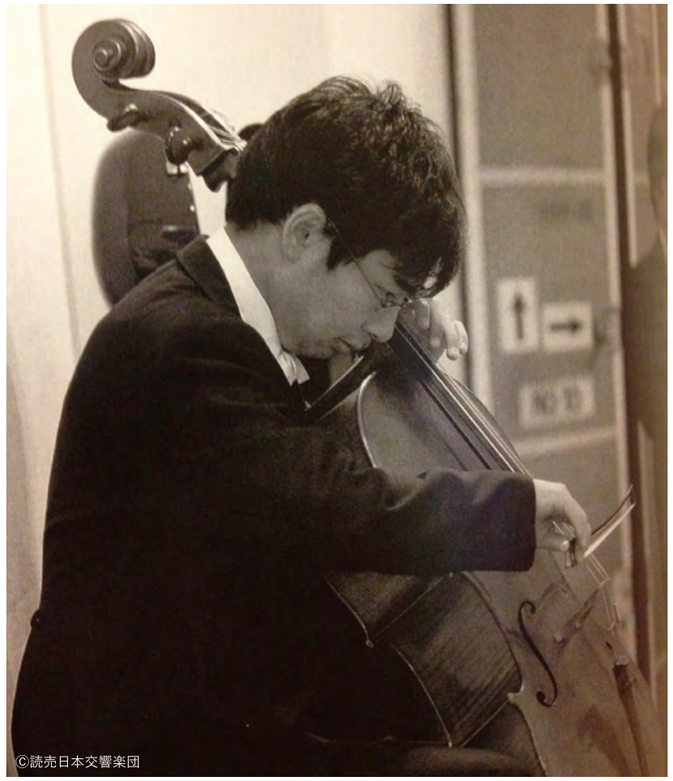
Takashi Shibamura
芝村 崇さん
チェロ
2005年大学卒業
2007年大学院科目等履修生終了

私にとってのチェロの魅力は、その「可能性」です。ヴァイオリンと比較すると、まだまだ演奏を進化させる余地があり、だからこそ「私だけの音楽を表現できる」と感じています。

「やっぱりチェロを弾きたい！」

チェロとの出会いは9歳。小学校の部活動でオーケストラに参加した時でした。かっこよくトランペットを吹きたかったのですがジャンケンで負け、同じ部にいた姉がヴァイオリン担当だったこともあり、なんとなくチェロ担当になったように記憶しています。とはいえ、その頃の私にとって、決して嫌いな楽器ではなかったのでしょう。野球部との二者択一に迫られた中学時代も、結局はチェロを弾くことを選び、レッスンに通いながら、オーケストラ部でチェロを弾き続けました。

その後、一般の男子高校に入学した私は、レッスンこそ通い続けてはいましたが、チェロと距離を置く高校生活を始めます。今考えてみると、その数か月間が私にとってのチェロの意義とその存在の大きさに気づかせてくれ、チェリストとして歩む人生のスタートを切らせてくれたのだと思います。「やっぱりチェロを弾きたい！」。一念発起した私は翌年その高校を退学し、東京音楽大学付属高等学校で新たに1年生からやり直すことにしました。また時を同じくして、将来は演奏家の道に進みたいと願い始めたとも思います。



©読売日本交響楽団

学生の願いを叶える土壌

付属高等学校時代はとにかく楽しい3年間でした。音楽という奥深いテーマを共有するためか、生徒同士はもとより、先生方もとてもフレンドリー、かつ真剣に接してくださる毎日。そのかいもあり、演奏技能の上達をはっきりと実感する日々で、弦楽器専攻の大学生と一緒に、「アンサンブル・エンドレス」の一員として演奏できたことは、とても有意義で貴重な経験になりました。

私は特にソリストになりたいと思っていたわけではなく、とにかくチェロが弾ければよかったのだと思います。大学時代は「ひたすらさらう毎日だった」としか言いようがありません。それでも苦痛に感じることはありませんでした。音楽大学に進まれる方は、自分が習いたいことをはっきり主張して求めたほうがいいと思います。大学は学生のための場所であり、それを叶えてくれる土壌が東京音楽大学にはあるのです。また、時間厳守や挨拶など、「プロの音楽家＝社会人」として最低限すべきことは、学生のうちに身につけてほしいと思います。

音楽に対して貪欲に求め続ける

大学卒業後、科目等履修生としての2年間を終えるのと同時に、私は幸運にも読売日本交響楽団に入団できました。入団当初は、演奏未経験の曲が次から次にやってきます。事前準備に追われる日々が続き、演奏が不調な時でも弾き続けなければならないのがプロの世界。そしてプロの音楽家であるためには、音楽に対して永遠に貪欲に求めていくべきだと思っています。自分がそれを求めない限り、決して自分も得られないわけですから。

©読売日本交響楽団

Profile

9歳よりチェロを始める。在学中特待生奨学金を得る。オーディションによる室内楽演奏会、および卒業演奏会に出演。今までにJ・シュタルケル、B・グリーンハウス、L・クラレットのマスタークラスを受講。第4回東京音楽大学コンクール第1位。チェロを苅田雅治、ドミトリー・フェイギン各氏に師事。室内楽を百武由紀、斎藤真知亜各氏に師事。現在、読売日本交響楽団団員。

続々と開催される、本学ならではのマスタークラス・公開講座

Lucie Robert
ルーシー・ロバート
マンハッタン・スクール・オブ・ミュージック教授、マネス音楽大学教授

米国人ヴァイオリニスト・音楽教育家のジョーゼフ・ギンゴールド氏の継承者、ルーシー・ロバート教授は、ニューヨークを拠点にアメリカ、カナダ、アジアで幅広い演奏活動を行っています。世界中の音楽祭やサマー・アカデミーからも招待され、数多くの弟子たちが主要国際コンクールで優勝、または上位入賞を果たし、ご自身も著名な国際コンクールの審査員に招かれています。2日間にわたって開催された今回の公開レッスンでは、本学付属高校生、学部生、院生の計10名が各1時間、同教授のきめ細かな指導を授かりました。

ルーシー・ロバート教授 ヴァイオリン公開レッスン
2017年5月23日 東京音楽大学J館309レッスン室／5月24日 J館スタジオ

Patricia Shehan Campbell
パトリシア=シーアン・キャンベル
ワシントン大学 ドナルド・E・ピーターセン講座教授

本学ミュージック・リベラルアーツ専攻と作曲指揮専攻の共催で、"What's In a Song? Music and Its Cultural Meaning(s)"／「歌にこめられたもの―音楽とその文化的意味」という演題のもと、パトリシア=シーアン・キャンベル教授の講座が開催されました。受講生たちは世界音楽の音源資料や指導方法、歌にこめられた文化的意味を学び、将来、演奏者・指導者として活動する際の貴重なヒントを得たと思います。同教授は、世界音楽の教育における第一人者であり、アメリカ各地を始め、世界各国のワークショップや講演に招かれています。2017年度小泉文夫音楽賞を受賞され、今回の来日が実現しました。

東京音楽大学 特別招聘演奏家シリーズ
"What's In a Song? Music and Its Cultural Meaning(s)"
「歌にこめられたもの―音楽とその文化的意味」
2017年6月9日 東京音楽大学A館100教室

James Barnes
ジェイムズ・バーンズ
作曲家・カンザス大学名誉教授

吹奏楽の権威、ジェイムズ・バーンズ教授。アメリカ軍からの委嘱作品が多く、日本からのものでは、2001年の陸上自衛隊中央音楽隊創設50周年記念演奏会で世界初演された『交響曲第5番・フェニックス』や『マーチ・かわさきのねいろ』『A Prayer for Higashi-Nihon(東日本への祈り)』などがあります。今回の講座は本学の授業「吹奏楽」の関係者を対象にした第一部と、一般にも公開された第二部で構成され、当初は演奏者の多さに驚いていた同教授も、熱くダイナミックに指導。定期演奏会を目前に控えた学生たちにとって、とても貴重な体験となったと思います。

東京音楽大学 特別招聘演奏家シリーズ
吹奏楽公開講座
6月26日 東京音楽大学A館100周年記念ホール

4月17日(月) ルーカ・ゴルラ 声楽公開レッスン
4月26日(水) マーガレット・フィンガーハット ピアノ公開個人レッスン
5月 8日(月) シモーネ・ルビーノ バーカッション公開レッスン
5月10日(水) ラッファエル・コルテージ 声楽公開レッスン
5月23日(火) ルーシー・ロバート ヴァイオリン公開レッスン
5月24日(水) ルーシー・ロバート ヴァイオリン公開レッスン
5月29日(月) 木ノ脇 道元 作曲芸術公開講座(第1回)
6月 7日(水) ルイス・クラレット チェロ公開レッスン
6月 9日(金) パトリシア=シーアン・キャンベル 作曲指揮専攻/ミュージック・リベラルアーツ公開講座
6月22日(木) パーヴォ・ヤルヴィ 指揮公開レッスン
6月26日(月) ジェイムズ・バーンズ 吹奏楽公開講座
9月 6日(水) ヴィンチェンツォ・タラメッリ 声楽公開レッスン
9月19日(火) 木ノ脇 道元 作曲芸術公開講座(第2回)
10月14日(土) リカルド・タムラ 声楽公開ワークショップ
10月30日(月) リカルド・タムラ 声楽公開レッスン
11月11日(土) 佐藤 俊介 ヴァイオリン公開レッスン
11月13日(月) ピエール・デュト トランペット公開レッスン
11月28日(火) クリストフ・エス ホルン公開レッスン
12月 7日(木) エリソ・ヴィルサラーゼ ミニコンサート&ピアノ公開レッスン

ほか ※予定を含む。

卒業生の進路

■教員新規採用

〈2017年度〉 (2017年7月20日現在)

都道府県名	東京都	千葉県	埼玉県	他県	
人数	17名	9名	7名	6名	合計39名

■企業就職

〈2017年度〉 (2017年7月20日現在)

株式会社三井住友銀行	6名	戸田建設株式会社	2名	株式会社ヤマハミュージックリテイリング	2名
株式会社みずほ銀行	1名	大和ハウス工業株式会社	1名	株式会社河合楽器製作所	3名
株式会社千葉銀行	1名	住友生命保険相互会社	1名	島村楽器株式会社	1名
株式会社京葉銀行	1名	三井不動産リアルティ株式会社	1名	一般社団法人日本音楽著作権協会(JASRAC)	1名
豊川信用金庫	1名	スカイマーク株式会社	1名	株式会社サマンサタバサジャパンリミテッド	1名
三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社	1名	さがみ農業協同組合	1名		
アコム株式会社	1名	株式会社アミューズ	1名		ほか多数

社会人講座

生涯を通じて音楽と向き合う

本学はさまざまな社会人講座を開講しています。「ピアノ個人レッスン」は、現役の演奏家・指導者によるレッスンを、本学の充実した施設を使用して受けるもの。初心者からプロの方まで、演奏技能のレベルと目的に合わせて学べます*1。また、「合唱講座」と、声楽個人レッスンを加えた「声楽・合唱講座」では、東京音楽大学の「合唱」を経験します。本年度は、オーディションに合格すれば、10月上演予定の「東京音楽大学創立111周年記念オペラ『ラ・ボエーム』」*2に出演することも可能です*3。その他、付属民族音楽研究所主催の講座も長年にわたり開催しており、本学はジャンルを超えたさまざまな音楽的価値を学ぶ機会を、多角的に提供しています。

*1 2017年度の講座は随時申込み受付中(7月20日現在)
*2 本誌P5参照
*3 2017年度の講座の受付は終了

社会人講座「ピアノ個人レッスン」を受講して

三輪 裕さん

子どもの頃のよき遊び相手だったピアノは、いつも私のそばに寄り添うパートナーでした。独学で弾いていた私は、高校1年からレッスンを受け始め、放課後、すぐさま帰宅してピアノに向き合う毎日。それは大学生活でも変わらず、社会に出て単身赴任した際にも現地にピアノを持ち込むほど、私にとってピアノは大事な存在だったんです。当時、毎日のオンオフにめりはりをつけてくれたピアノでしたが、今は毎日がオフ。それはそれで忙しい毎日です。幸運にも巡り合うことができた、宮崎和子先生のレッスンも途絶えがちの中、この講座をご案内いただきました。レッスン室ではピアノの音を通じて琴線に触れ、自宅では与えられる課題に必死に取り組むことは、まさに至福の喜びです。音楽大学と聞くと躊躇しがちなものですが、初心者でも音楽の素晴らしさを知ることができるこの講座のことを、地元のテニス仲間にも紹介したいと思っています。

Journal July 2017 No.45
東京音大ジャーナル45号
発行日…平成29年7月31日 発行所…東京音楽大学 広報課 〒171-8540 東京都豊島区南池袋3-4-5
TEL.03-3982-2717 FAX.03-3982-3317
http://www.tokyo-ondai.ac.jp

Concerts 2017
東京音楽大学主催演奏会

ソロ・室内楽定期演奏会
9月17日(日) 13:00　東京音楽大学A館100周年記念ホール

ピアノ教員によるコンサート
9月30日(土) 17:00　東京音楽大学A館100周年記念ホール

弦楽アンサンブル演奏会
10月7日(土) 17:00　東京音楽大学A館100周年記念ホール
指導・演奏：大谷 康子

創立111周年記念オペラ公演「ラ・ボエーム」
10月21日(土) 17:00　東京音楽大学A館100周年記念ホール
10月22日(日) 14:00　東京音楽大学A館100周年記念ホール
指揮：広上 淳一　　演出：粟國 淳

シンフォニーオーケストラ定期演奏会
12月14日(木) 19:00　東京芸術劇場コンサートホール
指揮：高関 健

［お問い合わせ］東京音楽大学 演奏課 TEL.03-3982-2496

2017年度

東京音楽大学冬期受験講習会
12月24日(日)～27日(水)
申込期間：11月24日(金)～12月1日(金)

入試についてはこちらをご覧ください
http://www.tokyo-ondai.ac.jp/exam/index.html

［お問い合わせ］東京音楽大学 教務二課 TEL.03-3982-3221

オープンキャンパス　9月23日(土・祝)

芸術祭　11月3日(金・祝)～4日(土)